

出来事の結果が望ましさの評価に及ぼす影響¹⁾

田 中 知 恵 (明治学院大学心理学部)

要 約

結果が不確実であった出来事に対する認知的再解釈と後知恵バイアスに関して実際の出来事を用いて検討した。オリンピック開催地決定前後に調査を実施し、当選都市ならびに落選都市に対する開催地としての望ましさや当選の可能性について調査参加者に回答を求めた。その結果、開催地としての望ましさにおいて当選都市は事前よりも事後に高く回答されたのに対し、落選都市は低く回答された。ただしこの効果はスポーツへの関与度によって調整され、スポーツへの関与の低い参加者は開催を望まなかった都市が落選した場合、すなわち肯定的な結果となった場合に、その都市の望ましさを低めた。また当選の可能性はスポーツへの関与度によって調整された。これらの結果は、関与が低く肯定的な結果となった場合の情報処理方略の観点より解釈された。認知的再評価ならびに後知恵バイアスの効果が出来事への関与度により調整される可能性について考察した。

キーワード：望ましさの評価、出来事の結果、後知恵バイアス、出来事後の再解釈

問 題

結果が不確実な出来事への対処

どのような結果となるか不確実な出来事に対し、否定的な結果が明らかになった場合、ひとが取りうるさまざまな対処に関してこれまで検討されてきた。たとえば認知的不協和の研究では、態度と一貫しない行動の重要性が低く評価されること (Simon, Greenberg, & Brehm, 1995), また認知的再解釈の研究では、デート相手に選ばれなかった場合に相手の魅力が低く評価されることや (Wilson, Wheatley, Kurtz, Dunn, & Gilbert, 2004), テスト結果が期待に達しなかった場合にテストの有効性が低く評価されること (田中・村田, 2007) などの知見が示されている。

このように、出来事の結果に応じて対象への評価を変えて対処する心理的傾向性に加え、明らかになった結果の方向性に沿って、事前に見

積もっていた可能性を変えることで対処する傾向性に関しては、これまで後知恵効果 (後知恵バイアス) の研究として検討がなされてきた。後知恵バイアスは Fishhoff (1975) によって提示された現象である (Blank, Musch, & Pohl, 2007)。その研究では、結果に対する事実を知っている場合に知らない場合よりも、人が出来事の結果の可能性を高かったと判断することが示された。Fishhoff (1975) はこの現象を、“進行する決定論 (creeping determinism)” と呼び、出来事の結果が明らかになる前よりも、明らかになった後で、人はその結果がより必然的で予測可能であったと考えると論じた。

また大統領の他国訪問という出来事に対して、事前にその可能性をどう見積もっていたのか参加者にたずねた Fishhoff & Beyth (1975) の研究では、事前の測定よりも実際の結果に近く回答された。この結果は、人が出来事の結果に沿った方向に、記憶を歪める可能性を示唆している。

このように、否定的な出来事の結果に直面した場合、人が対象への評価や判断を変えるという現象は、感情制御のメカニズムが生じたものとして解釈できる。つまり、人は出来事から生じたネガティブ感情に対処するために、事前の記憶をゆがめたり、そうした結果となることは必然だったと考えたりするのである。感情制御とは、感情状態をモニターし評価する過程において、感情の強度を維持もしくは変化（高揚もしくは抑制）させるため、あるいは感情の持続を延長もしくは短縮させるために、人が措置を講ずることと定義される（Gross, 1999）。近年では意識的・努力的な感情制御に加え、非意識的な感情制御に関する研究も進んでおり（Bargh & Williams, 2007; Mauss, Bunge, & Gross, 2007; Koole, 2009）、人がネガティブな感情の導出を意識しない場合においても認知的な方略を講じて対処することも示されている（e.g., Zemack-Ruger, Bettman, & Fitzsimons, 2007, 詳しいレビューについては田中（2010）を参照のこと）。

後知恵バイアスならびに認知的再評価もこうしたネガティブ感情制御のプロセスによって生じると考えられ、出来事に関連する事柄に対する関与度が高い場合、また否定的な結果となった場合に、そうでない場合よりも、より大きな効果が認められると予測される。たとえば、大統領選挙の前後に当選した候補者の成功の可能性に関してたずねたところ、調査参加者は当選者・落選者いずれの候補者に投票した場合でも、選挙前より選挙後に当選者の成功の可能性を高く回答したが、その効果は落選者に投票した参加者において大きいことが示された（Tykocinski, 2001, Experiment2）。調査参加者は、否定的な結果に直面したとき、事前に対立候補の当選可能性を高く評価していたと回答することで失望を和らげたと解釈される。

しかしながら、対照的に後知恵バイアスが否定的な結果によって大きくならないと考える研究者もいる。たとえば Louie, Curren, & Harich

（2000）は自己防衛的メカニズムが働き、否定的結果への自己責任を減ずるためにバイアスが小さくなると説明する。

このような予測の相違は、後知恵バイアスが一義的に定義づけられないために生じたと考えられる。Fishhoff（1975）ならびに Fishhoff & Beyth（1975）によって、後知恵バイアスが出来事の結果の必然性と予測可能性を高く、また結果の方向に記憶を歪めることとして捉えられたことからわかるように、後知恵バイアスには3つの構成要素があり、それぞれの要素に応じて定義も異なる（Blank, Nestler, Collani, & Fischer, 2008）。Blankらの整理によると、必然性の知覚とは、“わかっていた（knew-it-all-along）効果”，すなわち、出来事の結果をいったん知るとその出来事の必然性の知覚を変える傾向（Christensen-Szalanski, & Willham, 1991）であり、因果帰属のプロセスによって生じ、失望に対処する機能を持つという。前述した Tykocinski（2001）の研究結果も、このような感情改善のメカニズムによるものと解釈される。

予測可能性の知覚とは、出来事が起こったとき、どのようになるのかわかっていたと考える傾向性（Bryant & Guilbault, 2002）であり、メタ認知のプロセスによって生じ、自己防衛的機能を果たす。さらに記憶の歪みとしての定義は、もともとの判断よりも、出来事の結果に近い判断が思い出されること（Hoffrage, Hertwig, & Gigerenzer, 2000）であり、知識のアップデートによって生じると考えられている（Blank et al., 2008）。

後知恵バイアスに関連する研究では、これら構成要素のうちひとつ、もしくは複数を取り上げて説明がなされてきた。Tykocinski（2001）で扱われた概念は、上記の議論でいうところの必然性であり、Louie et al（2000）の研究で説明された概念は予測可能性に近いと考えられる。すなわち、後知恵バイアスについて検討するためには、研究で測定し、もしくは現象の解

積として用いる概念がどの要素であるのか明らかにする必要がある。

近年の研究ではこのような構成要素間の関係性についても検討されている (e.g., Blank & Nestler, 2006; Blank, Fischer, & Erdfelder, 2003)。たとえば, 第30回(2012年)夏季オリンピック開催地に立候補したライプチヒ(ドイツ)の参加者を対象にした研究では, ライプチヒが候補地として選ばれなかったことが明らかになる前後で, 必然性と予測可能性について測定した。その結果, 必然性の指標は失望の大きさと相関があり事後に大きくなったが, 予測可能性は事後に小さくなった(Blank & Nestler, 2006)。このように2変数間に負の関係が認められた結果の解釈として, Blank & Nestler (2006) は, 必然性は時間経過とともに変化する因果モデルが根底にある客観的なものであり, 予測可能性や記憶の歪みは主観的判断に基づくためと述べている。すなわち, ライプチヒが候補地に選ばれなかったのは小さい都市であったためというメディアでの報道等により, 参加者はそのような結果は客観的に必然であったと考えつつも, それを事前に知ることはできなかったと主観的に判断するのだという。

変数間の関係は状況によって相違する可能性もあり(Blank et al., 2008), 本研究では同様のテーマを扱ってこの点についても探索的に検討する。

本研究の概要

本研究では, 夏季オリンピック開催地の決定前後に調査を実施し, 当選都市ならびに落選都市の成功の可能性に対して, 当選都市の成功可能性を事後に高く, また落選都市の成功可能性を事後に低く評価する後知恵バイアスが認められるのか検討する。また, 候補地の望ましきに関して測定し, 対象への認知的再評価について検討する。なお, こうした現象はネガティブな感情状態が生じた場合の感情制御によって生

じると考えられる。よって, ネガティブ感情が強いほど, 大きな効果として認められるだろう。すなわち, 出来事に関連する事柄に対して関与度が大きい場合や, 望んでいた事態が実現せず否定的な結果となった場合である。このことを前提に, 本研究では以下の仮説を検討する。

オリンピック開催地が決定後, 当選した都市の可能性ならびに開催地としての望ましきの評価が高まり, 落選した都市の可能性ならびに開催地としての望ましきの評価が低まるだろう(仮説1)。こうした効果はスポーツへの関与が高い参加者においてより認められるだろう。また落選した都市での開催を望んでいた場合に大きいらる(仮説2)。さらに, 先行研究(Blank & Nestler, 2006)の研究では結果が明らかになった後の必然性の知覚と予測可能性の知覚という2変数間に負の相関が認められたことを受け, また前述した後知恵バイアスの構成要素に対する議論に関して検討するために, 開催地決定後の調査では必然性と予測可能性の知覚についても測定し, この問題に関して探索的に検討する。

なお, 研究実施にあたっては, 本研究の実施時期に検討されていた第31回(2016年)夏季オリンピック開催都市の決定を出来事として取り上げる。国際オリンピック委員会における開催地決定までの経緯は以下の通りである。2008年6月にシカゴ(アメリカ合衆国), 東京(日本), リオデジャネイロ(ブラジル), マドリード(スペイン)の4都市が候補地として選出されたが, 2009年10月2日の国際オリンピック総会にて投票が行われ, リオデジャネイロを開催都市とすることが決定された。²⁾

本研究では国際オリンピック総会での投票の前後に2回の調査を実施し, 上記の仮説について検討する。

方 法

調査参加者

都内私立大学の学生 58 名（女性）のうち、事前事後両方の調査に参加した 51 名を分析の対象とした。平均年齢は 19.80 歳 ($SD=1.49$) であった。

手続き

事前調査として、開催地決定直前に心理学関連の授業内で調査用紙を配布し、回答を求めた。候補となっていたシカゴ（アメリカ合衆国）、東京（日本）、リオデジャネイロ（ブラジル）、マドリード（スペイン）の 4 都市それぞれに対して、開催地に選ばれる可能性各 1 項目（開催地に選ばれる可能性についてどの程度だと思いますか）、開催地としての望ましさ各 1 項目（開催地としての望ましさはどの程度だと思いますか）、またスポーツに対する関与度 9 項目（スポーツをするのが好きだ・スポーツ観戦が好きだなど）、候補都市のひとつである東京での開催に対する事前態度 2 項目（東京で開催してほしい・東京で開催してほしくない（逆転項目））などについて、それぞれ 7 件法でたずねた。

事後調査は事前調査から 8 週間後（開催地決定から約 7 週間後）の同じ授業内で実施した。それぞれの都市の当選する可能性を事前に考えていた程度各 1 項目（決定前、開催地に選ばれる可能性についてどの程度だと考えていましたか）、開催地としての望ましさを事前に考えていた程度各 1 項目（決定前、開催地としての望ましさはどの程度だと考えていましたか）、また開催地がリオデジャネイロに決定したことの予測可能性 3 項目（オリンピックの開催地がリオデジャネイロになることはわかっていた・オリンピックの開催地がリオデジャネイロになることを予測できた・オリンピックの開催地を予測することは難しい（逆転））、必然性 2 項目（オ

リンピックの開催地がリオデジャネイロになったことは意外だと思う（逆転）・オリンピックの開催地がリオデジャネイロになったことは当然だと思う）などについて 7 件法でたずねた。予測可能性の項目は、Blank et al (2008) に示された 6 項目を参考にして作成した⁴⁾。必然性の項目は Blank & Nestler (2006) の 4 項目を参考に作成した。

なお事前調査・事後調査とも、あらかじめ調査への参加あるいは不参加は自由であることを告げ、参加希望をした受講生のみ調査用紙を配布することを説明したところ、全員が参加意思を表明した。事後調査を実施し、結果分析をした後の同じ授業内で研究の目的や結果について説明を行うとともに、本研究で扱う後知恵バイアスや認知的再評価について講義をした。

結 果

以下では、落選都市（東京）と当選都市（リオデジャネイロ）に対する回答について分析した結果を報告する。スポーツ関与度得点と東京開催事前態度得点はそれぞれ中位点で参加者を分割して分析に用いた。東京開催事前態度得点で得点が高い群は、東京が落選したため否定的な結果、得点が高い群は肯定的な結果となったため、前者を結果ヴェイレンス否定群、後者を結果ヴェイレンス肯定群とした。

都市の当選可能性評価

候補都市が開催地として当選する可能性についてたずねた項目への回答を分析した。東京可能性（前・後）×リオデジャネイロ可能性（前・後）×結果ヴェイレンス（否・肯）×スポーツ関与度（低・高）の分散分析を実施したところ、東京可能性の前後の主効果 ($M_s=4.30$ vs. 4.26)、東京可能性×スポーツ関与度の交互作用効果が有意な傾向が認められた（順に、 $F(1,46)=3.45$, $p<.08$, $F(1,46)=3.06$, $p<.09$ ）。後者の効果につい

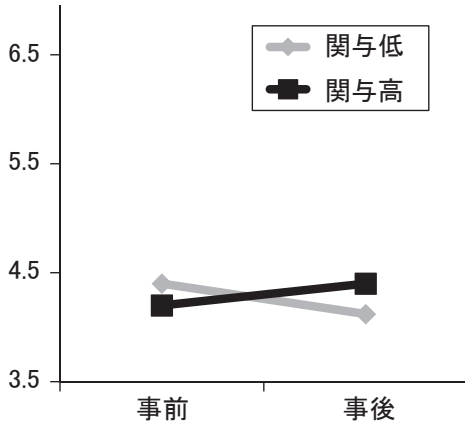


Figure 1. 落選都市（東京）の当選可能性評価
 平均値
 （関与低：スポーツ関与度低群，関与高：
 スポーツ関与度高群）

て Figure 1 に平均値を示す。

東京可能性×スポーツ関与度の交互作用は有意傾向ではあったものの、結果のパターンについて明らかにするために、関与低群ならびに関与高群それぞれにおいて事前事後の平均値に差がみられるか検討した。その結果、関与低群において事前と事後の東京での当選可能性評価には差が認められなかった（順に、 $M_s=4.40$ vs. 4.12 , $t(24)=1.15$, *ns*）。また関与高群においても事前と事後の東京の当選可能性評価には差が認められなかった（順に、 $M_s=4.20$ vs. 4.40 , $t(24)=1.00$, *ns*）。

開催地としての望ましさ評価

東京望ましさ（前・後）×リオデジャネイロ望ましさ（前・後）×結果ヴェイレンス（否・肯）×スポーツ関与度（低・高）の分散分析を実施したところ、東京望ましさ×リオデジャネイロ望ましさの交互作用効果が有意に認められた（ $F(1,46)=4.36$, $p<.05$ ）。Figure 2 に平均値を示す。

この交互作用効果のパターンについて明らかにするために、それぞれの都市の望ましさに

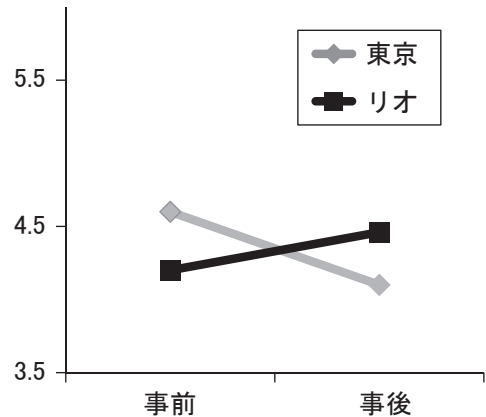


Figure 2. 落選都市(東京)と当選都市(リオデジャネイロ)に対する開催地としての望ましさ評価平均値

事前と事後の平均値に差がみられるか検討した。その結果、東京の望ましさの評価において事前と事後の平均値には有意な差が認められ（ $M_s=4.65$ vs. 4.12 , $t(50)=3.12$, $p<.01$ ）、東京の望ましさは事前より事後に低く評価されたことが示された。他方、リオデジャネイロの望ましさの評価においては事前と事後の平均値に有意な差は認められなかった（ $M_s=4.20$ vs. 4.47 , $t(50)=1.37$, *ns*）。

また東京望ましさ×結果のヴェイレンス×スポーツ関与の交互作用効果が有意に認められた（ $F(1,46)=5.44$, $p<.05$ ）。Figure 3 に平均値を示す。

この3要因の交互作用のパターンを明らかにするために、結果ヴェイレンスの否定群・肯定群それぞれにおいて東京の望ましさ（前・後）×スポーツ関与度（低・高）の分散分析を実施した。その結果、結果ヴェイレンス否定群においては東京の望ましさの主効果が認められなかった（ $F(1,24)=2.62$, *ns*）。また東京の望ましさ×スポーツ関与度の交互作用効果は見られなかった（ $F(1,24)<1$, *ns*）。

他方、結果ヴェイレンス肯定群においては、東京の望ましさ×スポーツ関与度の交互作用効

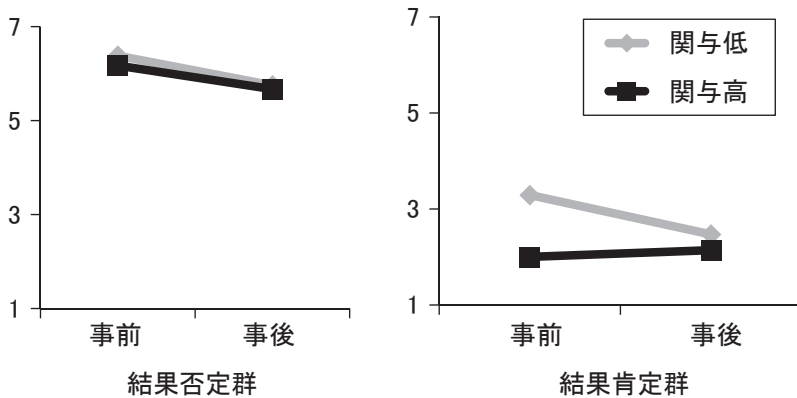


Figure 3. 落選都市（東京）の開催地としての望ましさを評価平均値
 （結果否定群：結果ヴェイレンス否定群，結果肯定群：結果ヴェイレンス肯定群，
 関与低：スポーツ関与度低群，関与高：スポーツ関与度高群）

果が有意に認められた ($F(1,22)=5.27, p<.05$)。平均値を比較すると，スポーツ関与度低群においては，事前と事後で有意に望ましさを評価が下がっていた ($M_s=3.29$ vs. $2.47, t(16)=3.35, p<.01$)。スポーツ関与度高群においては事前と事後で有意な差は認められなかった ($M_s=2.00$ vs. $2.14, t(6)<1, ns$)。

以上の結果より，東京の開催地としての望ましさを評価において認められた3要因の交互作用効果は，スポーツ関与度が低く，また肯定的な結果となった群が，事前よりも事後に評価を下げたことによって生じたものと考えられる。

予測可能性ならびに必然性の評価

事後調査において，開催地決定の予測可能性についてたずねた3項目（たとえば，オリンピックの開催地を予測することは難しい（逆転）など）に対する回答の信頼性係数を確認し ($\alpha=.70$)，3項目の得点を足し上げて予測可能性得点を算出した。この得点に対し，スポーツ関与度の高低による差があるか検討したところ，差のある傾向が認められた ($t(48)=1.82, p<.08$)。スポーツ関与度低群はスポーツ関与度高群よりも予測可能性を低く回答する傾向に

あった（順に， $M_s=10.12$ vs. 11.44 ）。

開催地がリオデジャネイロになったことの必然性についてたずねた2項目に対する回答には相関が有意に認められた ($r=.48, p<.001$)。この2項目の得点を足し上げて必然性得点を算出し，スポーツ関与度の高低による差があるか検討したが，群間に有意な差は認められなかった ($M_s=7.66$ vs. $8.28, t(48)=1.22, ns$)。

なお，予測可能性得点と必然性得点の間には正の相関が認められた ($r=.52, p<.001$)。これは，2つの変数間に負の相関が認められていた先行研究 (Blank & Nestler, 2006) とは一貫しない結果であった。ただし，スポーツへの関与度によって変数間の関係が異なるのか検討したところ，スポーツ関与度低群においては予測可能性得点と必然性得点の間に強い正の相関が認められたものの ($r=.63, p<.01$)，スポーツ関与度高群においてその相関は弱く，有意な傾向にとどまっていた ($r=.37, p<.07$)。このことは，予測可能性と必然性という指標の関係性が出来事に関連した事柄への関与度によって調整される可能性を示唆している。

考 察

開催地の当選可能性に関しては、落選都市(東京)の評価が事前よりも事後に低められた。この結果は、落選の結果が明らかになった後で“東京が落選することはわかっていた”と考える後知恵バイアスの影響と考えられる。また、こうした効果がスポーツへの関与度によって調整される傾向がみられた。統計的に有意な差はみられなかったものの、Figure 1に示したような平均値のパターンが認められた。スポーツという出来事のテーマに関連する事柄への関与の高い参加者が、結果が明らかになった後に東京での開催可能性を高く評価したのは、落選による失望感が大きかったためかもしれない。落選したものの、本来は当選見込みが高かったと考えることで、落選による失望感に対処したものと解釈できる。他方、スポーツ関与が低い参加者にとってはもともと落選都市が当選する可能性は低かったと考えるプロセスが働いた可能性がある。

開催地としての望ましさに関する評価においては、落選都市(東京)と当選都市(リオデジャネイロ)に対する評価の前後で仮説1と一致する結果が認められた。すなわち、落選都市に対しては事前より事後に開催地としての望ましさを低め、当選都市に対しては事前より事後に開催地としての望ましさを高めた。この結果は、出来事の結果に対する認知的再解釈がなされたため生じたと考えられる。しかしながら、落選都市の望ましさ×結果のヴェイレンス×スポーツ関与度の3要因の交互作用効果も有意に認められ、スポーツへの関与度が低い参加者が肯定的な結果となったときに落選都市の開催地としての望ましさを低めることが示された。他の条件では事前と事後で望ましさの評価が変化しなかったことを考えると、この結果は出来事に関連する事柄への関与度が低い場合の方が、また肯定的な結果となった場合の方が、認知的再解釈が生じやすいことを示すものかもしれない。

実際に、東京に対する開催可能性評価ならびに開催地としての望ましさの評価の平均値を見ると、全体的にスポーツへの関与度の高い群は関与度の低い群と比較して、事前と事後で評価の変化が小さい。

こうした結果がみられた理由としては、以下の2点が考えられる。すなわち、関与度が低く、また望んだ結果となったときはその出来事に対するこだわりの度合いも低いいため、容易に対象への解釈を変えやすいということである。このことは、後知恵バイアスや認知的再解釈が、否定的な結果への対処、つまりネガティブ感情改善によるプロセスによって生じるほかに、ポジティブ感情時の簡便な情報処理方略によっても生じる可能性を示唆している。感情と情報処理の研究においては、情報処理方略に対する感情の影響に関して、ポジティブ感情時とネガティブ感情時とは、人が取る情報処理の仕方に違いがあることが示されている(e.g., 田中, 2004, 2006)。この現象を説明する理論のひとつである感情シグナル説(Schwarz, 1990)では、感情は周囲の環境や状況に対する情報を付与すると考えられている。ポジティブな感情状態は状況が安全なことのシグナルとして働くため、ポジティブ感情時には認知的努力の必要がなく、ヒューリスティックな処理方略が採用される。対照的に、ネガティブな感情状態は状況に問題があることを知らせるため、ネガティブ感情時には状況の変容が動機づけられてシステマティックな処理方略が採用されるという。このように感情シグナル説では、感情の機能によってポジティブ感情時とネガティブ感情時の処理方略の相違を説明している。本研究において肯定的な結果を得た参加者に生じたポジティブ感情が、こうしたヒューリスティックな情報処理方略を導き、出来事の結果に応じて出来事後の評価を変えさせたという可能性がある。

もう1点、考えられる理由としては、関与度が高い人は、もともとオリンピック開催地の決定という出来事に対する知識が豊富であったこ

と、また実際にニュース等で新たな知識を獲得していたため、東京の落選という将来を正しく予測する力が高かった可能性がある。³⁾ そのため、肯定的な結果（東京での開催を望まない）もしくは否定的な結果（東京での開催を望む）のいずれの場合にも、事前と事後で評価を変動させなかったという解釈である。すなわち、本研究の結果は、社会の動きをどのくらい知っているのかという知識が将来予測に必要なことを示唆するものかもしれない。

上記2つのプロセスのいずれが働いたのか、もしくは両方が同時に働いたのかという点に関しては他の課題を用いた研究を実施して検討すること、また実験参加者の感情状態の測定を手続きに含めること、出来事関連の知識や知識獲得意図を測定することなど、今後さらなる実証的検証が必要である。

先行研究（e.g., Blank & Nestler, 2006）で測定された項目を参考にして作成し、出来事の結果が明らかになった後にたずねた開催地決定の予測可能性評価に対しては、スポーツへの関与度が高い場合の方が低い場合よりも高く回答する傾向にあり、この効果がテーマへの関与度によって調整される可能性が示された。この項目は開催地がリオデジャネイロに決定されることを“わかっていた”と考える程度を測定するものである。しかしながら、このことから、出来事のテーマに関連する事柄への関与度が高い人では、後知恵バイアスが生じやすいと解釈するには問題があるだろう。むしろこの結果と、スポーツ関与度高群において東京開催に対する事前の可能性評価が低かったことを考え合わせ、先述したようにスポーツ関与度の高い参加者は事前に知識が豊富なため、現実的に判断していたことを示唆する結果と解釈する方が妥当かもしれない。先行研究（Blank & Nestler, 2006）では、出来事の否定的結果が明らかになったとき、人が自己に対する否定的影響を可否するためのバイアスとして予測可能性を捉えているが、それは記憶の歪みとともに効果が認めら

れた場合に妥当な解釈であり、本研究のような結果の場合にはその解釈を適用することに注意が必要であろう。他方、リオデジャネイロが当選地に決定したことの必然性評価においては、このような関与度による差は認められなかった。

なお、予測可能性評価と必然性評価の間に正の相関が認められたことは、いずれの指標も後知恵バイアスの成分であることから解釈できるが、先行研究では負の相関が見出されたこととは一貫しない。これら変数の関係性は取り上げる出来事や領域によって異なる可能性も考えられ、今後の検討が必要である。またスポーツ関与度の低群においては強い相関が認められたものの、スポーツ関与度の高群においては相関が有意傾向にとどまっていたことは、変数間の関係が出来事や領域への関与度によって調整されることを示唆しており、本研究によって新たに提示された今後の研究課題である。

本研究の課題としては、上記に挙げたポジティブ感情時の情報処理方略の問題、関連する事柄への関与度が知識の豊富さ、さらに将来予測の正確さとどう関連するのかという問題、また予測可能性と必然性という2つの評価の関係性の問題のほか、以下の問題が挙げられる。

ひとつは、後知恵バイアスや認知的再解釈が感情制御や感情と情報処理のメカニズムによって生じるとすると、それらのバイアスは結果が明らかになったどの時点で生じるのかという点である。感情適応のモデル（Wilson & Gilbert, 2008）によると、人はポジティブ感情ならびにネガティブ感情が生じた後、そうした感情を生じさせた出来事に対して説明をしようと試みるという。そして説明がうまくいった場合には、説明の試みを終了し、出来事への接近可能性を低める。そしてその結果、感情反応が小さくなると考えられる。すなわち出来事の理解が進めば、そのことについて考えることはなくなり、感情的反応も消失するとモデルは説明する。後知恵バイアスが生じるプロセスにおいても、出

来事の結果が明らかになった直後では、それが否定的もしくは肯定的な結果であれ、こうした説明のストーリーは上手に作りにくい、時間経過とともに成功し、あたかも“最初からわかっていた”“そうなったのは当然だ”と人は思うようになるのかもしれない。

上記の点から考えると、本研究の事後調査は、オリンピック開催地が決定した7週間後に実施したが、より早い時期に調査を行えば異なる結果が見られた可能性がある。また遅い時期に調査を行った場合にはすでに感情適応がなされており、バイアスが小さくなる可能性もある。たとえば後悔感情の大きさについて検討した研究では、ある課題遂行に対する失敗のフィードバックを実験参加者に呈示し、その直後と10分後に後悔感情の強さを測定したところ、結果のフィードバック直後より10分後に感情の強さは弱まっていた(道家・村田, 2009)。本研究で扱ったネガティブ感情は、実験参加者自身が取った何らかの行為に対して生じたわけではなく、道家ら(2009)が測定した後悔感情とは相違する点があるが、いずれもネガティブな感情であり、そうした感情を制御しようとする働きがあることを考えると、同様の結果が認められる可能性があるだろう。

また他の検討課題とも関連するが、取り上げる出来事の内容や領域についても検討する必要がある。本研究の調査参加者はすべて大学の女子学生であり、スポーツへの関与度や開催地に望むもしくは望まない理由にも何らかの偏りがあったかもしれない。これらの点についてもさまざまな出来事を扱った実証的研究を実施し、検討していく必要があるだろう。

引用文献

- Bargh, J. A. & Williams, L. E. 2007 The non-conscious regulation of emotion. In J. J. Gross (Ed.), *Handbook of emotion regulation* (pp. 429-445). New York: Guilford Press.
- Blank, H., Fischer, V., & Erdfelder, E. 2003 Hindsight bias in political elections, *Memory*, 11, 491-504.
- Blank, H., Musch, J., & Pohl, R. F. 2007 Hindsight bias: On being wise after the event. *Social Cognition*, 25, 1-9.
- Blank, H. & Nestler, S. 2006 Perceiving events as both inevitable and unforeseeable in hindsight: The Leipzig candidacy for the Olympics. *British Journal of Social Psychology*, 45, 149-160.
- Blank, H., Nestler, S., von Collani, G., & Fischer, V. 2008 How many hindsight bias are there? *Cognition*, 106, 1408-1440.
- Bryant, F. B., & Guilbault, R. L. 2002 "I knew it all along" eventually: The development of hindsight bias in reaction to the Clinton impeachment verdict. *Basic and Applied Social Psychology*, 24, 27-41.
- 道家瑠見子・村田光二 2009 後悔の過大推測: ネガティブ・フィードバック直後と時間経過後の予期的後悔と経験後悔 実験社会心理学研究, 48, 150-157.
- Fishhoff, B. 1975 Hindsight ≠ foresight: The effect of outcome knowledge on judgment under uncertainty. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 1, 288-299.
- Fishhoff, B. & Beyth, R. 1975 "I knew it would happen": Remembered possibilities of once-future things. *Organizational Behavior and Human Performance*, 13, 1-16.
- Gross, J. J. 1999 Emotion regulation: Past, present, future. *Cognition and Emotion*, 13, 551-573.
- Hoffrage, U., Hertwig, R., & Gigerenzer, G. 2000 Hindsight bias: A by-product of knowledge updating? *Journal of Exper-*

- imental Psychology : Learning, Memory, and Cognition*, 26, 566-581.
- Koole, S. L. 2009 The psychology of emotion regulation : An integrative review. *Cognition and Emotion*, 13, 505-521.
- Louie, T. A., Curren, M. T., & Harich, K. R. 2000 "I knew we would win" : Hindsight bias for favorable and unfavorable team decision outcomes. *Journal of Applied Psychology*, 85, 264-272.
- Mauss, I. B., Bunge, S. A., & Gross, J. J. 2007 Automatic emotion regulation. *Social and Personality and Psychology Compass*, 1, 146-167.
- Schwarz, N. 1990 Feeling as information : Informational and motivational functions of affective states. In E. T. Higgins & R. M. Sorrentino (Eds.) , *Handbook of motivation and cognition : Foundations of social behavior. Vol. 2* (pp. 527-561) . New York : Guilford Press.
- Simon, L., Greenberg, J., & Brehm, J. (1995) Trivialization : The forgotten mode of dissonance reduction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 247-260.
- 田中知恵 2004 関連感情がメッセージの精緻化に及ぼす影響 : 印刷媒体広告を用いた情報処理方略の検討 社会心理学研究, 20, 1-16.
- 田中知恵 2006 感情と認知の主要理論 北村英哉・木村晴(編)感情研究の新展開 (pp. 21-42) . ナカニシヤ出版
- 田中知恵 2010 感情とその制御 認知心理学会(監修)村田光二(編) 社会と感情(現代の認知心理学第6巻) (pp. 98-120) 北大路書房
- 田中知恵・村田光二 2007 出来事の生起確率が認知的再解釈に及ぼす影響 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 8, 29-34.
- Tykocinski, O. E. 2001 I never had a chance : Using hindsight tactics to mitigate disappointments. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 376-382.
- Wilson, T. D., & Gilbert, D. T. 2008 Explaining away : A model of affective adaptation. *Perspectives on Psychological Science*, 35, 370-386.
- Wilson, T. D., Wheatley, T. P., Kurz, J. L., Dunn, E. W., & Gilbert, D. T. 2004 When to fire : Anticipatory versus postevent reconstruals of uncontrollable events. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 340-351.
- Zemack-Ruger, Y., Bettman, J. R., & Fitzsimons, G. J. 2007 The effects of non-consciously priming emotion concepts on behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 93, 927-939.

脚注

- 1) 本研究の一部は日本心理学会第75回大会にて発表された。
 - 2) 第31回(2016年)夏季オリンピック開催地の決定に関する情報は、国際オリンピック連盟のホームページを参考にした。(URL: <http://www.olympic.org/rio-2016-summer-olympics>)
 - 3) この可能性に関しては、沼崎誠先生(首都大学東京人文科学研究科教授)よりご指摘いただきました。記して感謝申し上げます。
 - 4) Blank et al (2008) に示された予測可能性の項目は、論文中の説明によると、以下で使用された項目を訳出したものである。
- von Collani, G., & Blank, H. 2003

Persönlichkeitsmerkmale, soziale Überzeugungen und politische Parteipräferenzen : Eine Internetbefragung zur Bundestagswahl 2002. [Personality traits, social beliefs, and political party preferences : An internet survey on the occasion of the German parliamentary election 2002.] *Zeitschrift für Politische Psychologie*, 11, 307-324.

After the event evaluations of the desirability of an event

Tomoe TANAKA (Faculty of Psychology, Meiji Gakuin University)

Abstract

Effects of cognitive reconstrual and hindsight bias for unconcerned events were investigated using a real event. Two waves of assessment were conducted before and after the venue of the Olympic Games was decided, inquiring the probability and the desirability of a city being selected as the host city. Results indicated that desirability rating of the selected city increased after the selection compared to before. Moreover, the desirability rating of the unselected city decreased after the decision, compared to before. However, this effect was moderated by the respondent's involvement with sports. Participants with low involvement lowered the desirability of the unselected city after the selection when they experienced positive results. The probabilities being selected were moderated by the respondent's involvement with sports. These findings were discussed in terms of information processing strategy of people with low involvement when they meet the positive results. The possibility that involvement in an event may moderate the effects of cognitive reconstrual and hindsight bias is discussed.

Key words : evaluation of desirability, result of event, hindsight bias, postevent reconstrual